

2022年08月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筧 集

菖蒲湯の菖蒲ゆらりと朝の風	小 寫 和
間食に新茶一服茶の工場	中 島 冬子
夏立つや巫女は緋色の風まとひ	牧 田 満知子
熾入れの焙炉や新茶四キロを	丹 羽 康夫
目高五匹きらきらと連れ帰る	西 五 辻 芳子
そよ風に腰くねらせて鯉のぼり	石 原 のり子
珈琲の一段と濃く迎へ梅雨	大 石 高典
雑草の石割るちから夏に入る	植 田 清子
轉りに轉り答へ竹の径	大 野 千鶴子
原爆を知る吾が願ひ聖母月	友 永 基美子
半世紀基地は変はず復帰の日	福 地 義雄
覚えなき母の温みや茄子の花	前 田 鈴子
燕とび人は群なしアーケード	仁 田 浩
露剥きし香り今宵の肴とす	朝 田 玲子
夏の花ひとり歩けば知らぬ町	川 内 一浩
麦青むだだつ広さを走り抜け	浅 利 美鈴
老鶯や昔は谷へ水汲みに	奥 野 千秋
列あれば並びたくなる卯月かな	陶 慧慈
水田の闇の深さや夜鷹啼く	福 江 ちえり
ほんのりと母の香のある扇子かな	大 野 邦夫
太平洋へ曲り下りや蟻の道	福 のり子
流鏝馬の鞍の手入れや神事前	谷 口 文子
青竹を割り器とす洗鯉	鳥 居 裕子
白に白重ねて眩し更衣	碓 氷 芳雄
夏めくや日差しに白きグラウンド	片 山 旭星
溪流に釣糸光る若葉かな	佐 藤 聡
慰めはいらぬ藤房揺るる日は	竹 中 一花
さやさやと風に吹く新樹かな	田 中 勝
三千年清水湧き出づ遺跡村	櫛 淵 かりな
暮れかかる道やしらじら山法師	城 戸 崎 雅崇
鷹巢立つオホーツク海波高し	中 村 順次
苗箱を渡すに父と子の氣息	山 口 容子
秘仏見しその目に若葉仰ぎけり	塚 本 郁子
けんけんと鳴くが見えずよ新樹光	坂 元 百合子
九十二吾に端午の節句かな	長 瀬 朋孝
ハンカチを差し出す涙ぐむ人へ	田 崎 セイ子

2022年07月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

影のみの揺るる御苑の糸桜	小 寫 和
ものの芽や文房具屋の品揃へ	朝 田 玲 子
猫の子の柱に傷の背くらべ	碓 氷 芳 雄
大戸開け祖母の待ちみる初燕	佐 々 木 成
陽炎や山のふもとの古戦場	片 山 旭 星
清明や濁音のなき鳥の声	森 壹 風
俊寛の愛でし谷かや桜散る	中 井 昭 雄
茎立や腓骨の罅は自然治癒	仁 田 浩
店の戸は開けておけよと初つばめ	川 上 和 昭
竜天に登る気魂の筆のあと	西 五 辻 芳 子
夜更けては深呼吸せる桜かな	石 原 ゆ き 子
花冷や戦禍の絶えぬ人の世ぞ	植 田 清 子
戦禍忘れぬ八十半ば桜散る	加 藤 か ず 子
魚の影忙しく走り鳥帰る	友 永 基 美 子
骨折の指もてあます遅日かな	村 木 道 子
ミサ斉唱「いのちの歌」や鳥雲に	富 沢 壽 勇
ぬひくるみ椅子に座らせ春灯	川 内 一 浩
桜咲く夜行列車の北進に	福 の り 子
不揃ひの籠に盛り上げ染卵	福 江 ち え り
風に乗り風となりたりしやぼん玉	大 野 邦 夫
白蝶の来て去りて来て友逝きぬ	前 田 鈴 子
雲雀の巣移しシニアのサッカー場	鴻 坂 佳 子
風光る木遣の唄の朗々と	櫛 田 かり な
奈良なれやホテルの朝に蕨餅	田 中 勝
亀またも首を伸ばすよ藤の花	城 戸 崎 雅 崇
波しぶく能登の海岸春の風	松 澤 博 子
橋膨れ崩れ落ちたり蜃気楼	坂 利 美
囀りや夢の続きのやうに聞き	小 堀 恭 子
さざえ焼く磯の香りの泡立ちて	小 堀 尚 美
小流れの石につまづく花筏	田 辺 美 千 代
アルバムを作る職とて啄木忌	森 幸 子
字寄りそふごと一人静の花の数	山 口 容 子
留守番や巣組の鳥を友となし	奥 野 千 秋
橋渡るたび海近し風薫る	青 井 律 子

病室より見渡す畠の穀雨かな 長瀬 朋孝
ウクライナの平和祈るや春落葉 玉元 庄弘
ふらここや風切るこち鳥のごと 津嘉山 典

2022年06月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出
氷 筍 集

ぼんぼりの明り丸うに春障子 朝田 玲子
木瓜の花ひと鉢ぽつと本能寺 森 壹風
残雪の風吹き抜くる廃牛舎 佐々木 成
霞みたる朝の街出る旅に出る 小畠 和
春の日や石膏接ぎの出土品 仁田 浩
白雲や故郷は伊予の遍路道 片山 旭星
玉砂利に吸ひ込まれゆく蝶の影 谷口 文子
教習車遠慮がちなり花吹雪 丹羽 康夫
菜の花へサイクリングの列消ゆる 川上 和昭
啓蟄や蟲の顔して土均す 長瀬 朋孝
隊列を組みしづかなり鳥帰る 植田 清子
雛の前四角に座る男の子 大野千鶴子
谷川の流れ豊かに山笑ふ 加藤かず子
里帰りの子の欠伸日の永し 田崎セイ子
蛤の音立てて開く潮汁 立石 律子
マリア様とふ名の椿紅差して 友永基美子
名山と呼ばるる山や風光る 野木 正博

生計とて籠一杯の蓬摘む 森 幸子
礼堂に火の粉爆ぜたりお松明 西五辻芳子
戦場の子らに日本の風届く 山本 京子
漆黒の海漂ふよ朧月 津嘉山 典
けん玉のこつんと填る春休 細見 昌代
万葉の和歌の謎解く春の夢 森川恵美子
カステラに焼け目の蜜や春の風邪 坂 利美
燈籠を根方に抱き椿咲く 福江ちえり
キャンバスを黒に染め上げ春愁ひ 林 清恭
居酒屋の跡地花壇にチューリップ 吉田 達哉
あらがひしことを手紙に卒業す 小堀 恭子
白鳥は羽毛一片残し去る 山口 容子
鳶の滑空その青空に畑おこし 山田ミチ子
仏間へと春日こぼるる花頭窓 奥野 千秋

火の散華風を捕へてお松明	松村 滋子
裏通り歩くが好きよ京の春	小川 妙子
討議いづれも決まらずにゐる春の雨	石田 祥子
地図に名のなきうさぎ島春の雨	坂元百合子
鴨走るとき首の揺れ尻の揺れ	田中ミヨ子
膝当てに土のぬくもり種を蒔く	玉元 庄弘

2022年05月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

空と海ばうばくとして白魚汲	朝田 玲子
梟の絶えて寂ぶるよ村社	佐々木 成
展覧会折り返しどき二月尽	小 瀧 和
庭石へ虫が身を寄せ春疾風	碓氷 芳雄
肩車の小さき仮面よ謝肉祭	鴻坂 佳子
涅槃図に息のやうなる音のあり	仁田 浩
遊戯の兎の相の手めきし初音かな	森 壹風
当て無くも夕日浴び行く名残雪	石原ゆき子
風切れれば耳切れさうな余寒かな	谷口 文子
寒林へちぎれ雲疾し宿遠し	荒木 昭代
話弾み初稽古の始まらず	植田 清子
掌にのせ独楽習ふ日暮まで	大野千鶴子
北国の除雪の労を思ひやり	加藤かず子
土佐よりの土の匂ひや露の臺	栗本 一代
雪止むや午後の予定の動き出す	田崎セイ子
雪降ると海苔一振りの酸辣湯	陶 慧慈
突然に一点睨み狐の犬	鳥居 裕子

掻き上ぐる名残の雪の重さかな	福江ちえり
上昇の機外を撮し雪の果	田中 勝
夜空より生まれて来たり春の雪	片山 旭星
少年の釣竿春の溪を釣る	竹中 一花
弾みごころ華やぐ軽さ春ショール	山本 京子
轉りや碎石場の休業日	大野 邦夫
出展の上野へ急ぐ春コート	林 清恭
朔日の神棚飾る二月かな	森川恵美子
コンパスに方位確かめ恵方道	城戸崎雅崇
帰港せる喫水深き若布刈舟	中村 順次
春光や並足にゆく駒の音	谷 晃

大茶園ファン一斉に霜の朝	原田久仁一
漕ぎながら体調測る春の朝	吉田 達哉
雛飾る官女真似ある三姉妹	小堀 尚美
春待つや主治医の前に背を伸ばし	前田 鈴子
生涯の働きぐせや土蛙	森 幸子
綾取や勝手に動く婆のゆび	山田ミチ子
百年の土間にこもれる余寒かな	奥野 千秋
闘志見せ少年投手豆を撒く	小川 妙子
可惜夜を漫ろ歩きに桜かな	津嘉山 典

2022年04月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

砕け飛ぶ氷柱や朝日乱反射	碓氷 芳雄
綿入の祖母の縫目の今にして	朝田 玲子
餅花や小さき葉の芽の見える来し	小嶌 和
御祭殿の四つ重なる鏡餅	中井 昭雄
真正面は雪の比叡や初御空	中島 冬子
すれちがふ人の眩く寒さかな	佐々木 成
凍滝の無音の空の深さかな	鴻坂 佳子
朝日差す賀茂の社に謡初	河村 純子
神と医者と信じようとぞ初神籤	川上 和昭
厳寒の廊小走りの僧若き	加藤かず子
寒鴉一羽がよろし枝の上	城戸崎雅崇
片腕は長き枝なり雪だるま	立石 律子
数へ日や残る仕事を日割にし	田中ミヨ子
冬日向十指広げて空へ向け	友永基美子
寒に入る術後や麻醉醒め難く	長瀬 朋孝
甘蔗刈の支度ととのへ人手待つ	福地 義雄
雑煮餅小さく切りて夫のため	藤本 隆子

雪かきのせめて門まで二度三度	村木 道子
年酒の小瓶に足るよ子の世代	森 幸子
卓上に苗育ちをる春隣	陶 慧慈
雪代の碧さ逆巻き落ちゆけり	福江ちえり
襦袍着て学生寮の句会かな	大石 高典
人恋しきポケットの手よ息白し	浅利 美鈴
花びら餅完売とあり虎屋なり	宮原亜佐美
巢の主いつこそ高き枯木立	福 のり子



体温を測ることより初仕事	谷口 文子
冬苺あるに手付かず獣道	奥野 千秋
寒の夜や音立て落つるブレーカー	斎藤よし子
ランドセル売場広げて二月来ぬ	中村 順次
待春や貨物列車の最後尾	吉田 達哉
軒端への一歩気を張る雪下し	大野 邦夫
正月や父まかなひの祝ひ膳	田辺美千代
初鏡夫あるかぎり紅差して	前田 鈴子
晴れたりと雪掻きに出る老い二人	山口 容子
降る雪に見とれて鍋を焦しけり	石原ゆき子
数歩ごと持ち重りする冬菜買ひ	小川 豊子
二上山に睡る皇子や虎落笛	松村 滋子

2022年03月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

鯛焼の重さに湯気の重さかな	仁田 浩
団居るに休符打つごと冬の雷	朝田 玲子
冬の夜や針の止まりし置時計	片山 旭星
鐘楼の手綱曳くとき息白し	中井 昭雄
寒がりの男子角巻育ちなり	中島 冬子
新しき草履たたきに一葉忌	河村 純子
初荷とて福袋解くさて何ぞ	西五辻芳子
紙漉の作業場見やり色紙選る	鴻坂 佳子
宇治川の疾き瀬音に山眠る	荒木 昭代
帆船の眠る波止場や星月夜	植田 清子
鳴き声の棲み分けてゐる冬の鳥	城戸崎雅崇
年毎に太字となりし賀状書く	立石 律子
野仏に供へし柿の熟しをり	田中ミヨ子
貫花の舞あでやかや冬ぬくし	知念 幸子
松手入すみし庭師に空広き	村木 道子
鱒をひた待つ漁の番屋の灯	佐々木 成
初晴の稲村ヶ崎よりの富士	小畷 和

玉泡や醜鍛へる冬の水	森 壹風
むささびの一声に森しづもりぬ	鳥居 裕子
鴨鍋の尽き語らひの尽きずをり	浅利 美鈴
着ぶくれや九十九島の影揺らぐ	谷口 文子
立冬に漬け立冬へ祖母の味	陶 慧慈



踏み入りぬ落葉の深さやはらかさ	福 のり子
粉雪やかんざし光る舞妓みて	佐藤 慎一
気嵐や海に向かうの劔岳	野木 正博
翼果つる兵士の海や寒椿	牧田満知子
電線も命の糸よ冬夕焼	櫛渕かりな
あたたかき涙のありて年の暮	斎藤よし子
噴煙のごと吹き上ぐる富士の雪	丹羽 康夫
吹き熾す炭団焔めく忌日かな	福江ちえり
十に八九を棄てしとや蜜柑山	坂 利美
おはやうの声のつくりし白き息	大野 邦夫
しののめの谷川ひびく臘八会	小堀 恭子
黒豆の脱穀終り田は雪に	山口 容子
九十二の齡全う年惜しむ	長瀬 朋孝
冬の夜や姉困らせる留守居の児	田崎セイ子
朝ごはんよと呼ばれたし寒卵	玉元 庄弘

2022年02月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

冬晴やかつての町の雑木林	小 寫 和
走り根のここにありしか落葉搔	朝田 玲子
勢子の放つ角伐りをへし鹿いづこ	西五辻芳子
花野原坐ればここが居場所なり	河村 純子
川波の寄るたび葦の枯れ騒ぐ	佐々木 成
枯蠶螂何用ありて辞書の上	鴻坂 佳子
南座のまねき仰ぐに初時雨	中井 昭雄
枯蠶螂身を尖らせて轍道	牧田満知子
湯豆腐の湯気ほふほふと笑ひ皺	碓氷 芳雄
客来ればかしら被りて獅子の舞ふ	青井 律子
サックスの流るる河原秋深し	植田 清子
小魚を啜へて浮びくる小鴨	城戸崎雅崇
病棟の人に厳しき冬の雷	長瀬 朋孝
透きとほる逸品若狭干鰯	前田 鈴子
化け狐出しとふ崎の枯尾花	森 幸子
神無月修復急かるる大鳥居	仁田 浩
氏神の戻りを祝ふ神楽月	森 壹風

忽然と子の丸刈りぞ鎌鼬	富沢 壽勇
山凍つや駆除とふ文字の猷道	鳥居 裕子
五湖の波立つざわめきの冬来る	田辺美千代

絵巻めく大いなるさま冬の月	田中 勝
紅葉狩のち渋滞の中京へ	石原ゆき子
教会堂にチェロの音のあり冬の庭	櫛淵かりな
バス迂回する華やぎに酉の市	斎藤よし子
爛酒をいのちの水と言ふ父と	大野 邦夫
冬の日でするりと翳る苔の庭	小堀 恭子
冬風や岬の浜の干し魚	小堀 尚美
恐竜のしつぽに添へ木冬支度	山口 容子
家事こなす母に勤労感謝の日	浅利 美鈴
柿食うて種植ゑてみむ蟹の真似	荒木 昭代
髭白き宮司留守居よ神の旅	大野千鶴子
月蝕の冴ゆ咆哮のオートバイ	國兼 弓華
カタログのあり余るほど年用意	藤本 隆子
日の向きに風を呼び込む吊し柿	松村 滋子
飛ぶ鳥のいつしか変はり冬支度	塚本 郁子
長堤へ軽石寄する冬の波	志多伯節子
耳立てて秋の音聞かうさぎかな	玉元 庄弘

2022年1月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

自然薯の土の寝床よ時を待つ	富沢 壽勇
七節虫よジャコメッティの男めく	中島 冬子
長き夜のジェームズ・ボンド最終版	鈴木 春菜
秋袷いま足元は松葉杖	河村 純子
月ほのと行き交ふ瀬戸の舟の影	碓氷 芳雄
廃銀山つらぬく川の水澄めり	佐々木 成
薄明や搾り出さるる新豆腐	中井 昭雄
ランドセル放り刈田に遊びけり	片山 旭星
落人の里の渋柿猿なかし	青井 律子
どの店も列新蕎麦の深大寺	城戸崎雅崇
渡り来し群に金黒羽白をり	栗本 一代
復興いまだ首里城の小春空	志多伯節子
余命など悩むなかれと源義忌	友永基美子
とりどりの帽子の動く花野かな	本多 智恵
豆殻にのこる豆爆ぜ夕支度	前田 鈴子
木犀の忍び入る夜気飯の宿	朝田 玲子
母強し南瓜切るとき爪立ちて	鳥居 裕子
吾亦紅胸にしもうておくことも	山本 京子



秋晴や魚くはへて白い鳥
秋麗ら今日を最後の献血日
長じたる子を案ずるにそぞろ寒
朝顔や風に流されブーメラン
阿蘇噴火に友を気づかひ秋寒し
昼さかな鴉の止まる古案山子
原生林に風穴を抱き秋の富士
屋上を修理する影冬隣
柿に色加へて里の陽のゆるび
顔よりも大き諸なり子の掲ぐ
月白や音読遠く聞え来る
大原より届けられたる名残茄子
虫ごとに籠かへてをる男の子
拍子木のくわんくわんと星月夜
朝日さす初冠雪の八ヶ岳
病室の窓に親しむ紅葉かな
山里を歩きませうよ秋うらら
瓜坊に獣と忘れゐる仕草
眠られぬ夜を恵みとす虫時雨

田中 勝
石原ゆき子
小堀 尚美
櫛淵かりな
森川恵美子
佐藤 聡
中村 順次
坂 利美
森 幸子
山口 容子
山田ミチ子
大野千鶴子
藤本 隆子
細見 昌代
松村 滋子
長瀬 朋孝
小川 妙子
田崎セイ子
玉元庄弘

2021年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

円窓に切りとる秋の輝けり
とどこほる世をひたすらに秋遍路
菩提の実墓口開けて拾ひをり
自死の友思ふ夕べや吾亦紅
復元の鐘のこだます盆の寺
凭れ合ふ石仏なり露しとど
メダル手にはにかむ女兒や草相撲
秋晴や会議の声のよく届き
赤とんぼ負はれし姉の三回忌
古りし家に出入自由の虫あまた
桐一葉土偶の兵のいかり肩
千の風になつて流るる翺雲
義父宛の赤紙の褪せ秋彼岸
今宵書く梶の一葉のねがひ哉
秋晴や村の子供は外に遊び
雨月とて翌朝西にくつきりと
月天心比叡の山の揺るぎなく

仁田 浩
朝井 玲子
野木 正博
中井 昭雄
佐々木 成
木村 静子
小畠 和
富沢 壽勇
植田 清子
加藤かず子
立石 律子
友永基美子
中野 梓
西五辻芳子
福地 義雄
山中ひでの
片山 旭星

伝言は小声に申すすがれ虫	河村 純子
塩梅のよき漉し餡よ秋うらら	古川 邑秋
山繭の日差しに伸ぶる金の翅	福江ちえり
長雨や合羽着せられたる案山子	大石 高典
気配あればつい見てしまふ穴まどひ	益子 桂子
蒟蒻をさしみとしたり月見酒	森川恵美子
秋風の汽笛のせくる浜離宮	城戸崎雅崇
秋風の吹き抜けてゐる関ヶ原	中村 順次
指揮棒を構へるやうに子蠶螂	大野 邦夫
朽ちかけし土蔵のことを稲架日和	小堀 恭子
二メートル跳ぶかや飛蝗逃ぐるとき	田辺美千代
海の音遠くにありぬ月の宿	中西 則雄
目玉まだ蒼きに死するおにやんま	前田 鈴子
稲を刈る音反響す山の村	山口 容子
初百舌鳥のこゑに背筋の伸ぶる朝	山田ミチ子
かなかなに背を押されゐる滑り台	佐藤 慎一
夕蟬や何も売れずに店ひと日	谷口 文子
秋夕焼二上山に色を置き	細見 昌代
新聞を小脇に朝の栗拾ふ	小川 妙子
名月や雲のあそびに気を揉んで	杉本 伸一

2021年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

語り継ぐことご法度に水喧嘩	仁田 浩
盆荒や納屋の中なる釣道具	朝井 玲子
八月や銃痕ありし父の脛	古川 邑秋
宿坊のはしやぐ坊主子夏休	南田美恵子
孟蘭盆会マスク越しなる読経かな	大石 高典
機とともに成すとふ上布織る媼	栗本 徳子
天気図の端から端へ油照	河村 純子
東京の焦土より富士終戦日	川上 和昭
海の日や吊されてあるゴムスーツ	益子 桂子
妙法の炎は一つ小雨降る	片山 旭星
教会の鐘よ泰山木の花	西五辻芳子
送火の闇のむかうにありがたう	栗本 一代
深閑と物音潜む炎暑かな	植田 清子
終戦の日や女子学徒一人逝く	福地 義雄
燕帰る残せしものを後始末	藤本 隆子

終戦日父母の痛嘆知らざりし
樺太へ渡りし漁師の墓洗ふ

森 幸子
佐々木 成

耳塚の辺り激しき虫の声
中腰へ水鉄砲の流れ弾
台風を支へ付けたき老大樹
押黙り灯籠流す原爆忌
祖母の背の港にしがむ茄子の馬
胸がすくほどの根強さ草むしり
蝸に一夜の宿を貸しにけり
祖父の釣竿そのままよ震災忌
ゆらめきの陰の深さよ夏木立
棚経や草履の小僧小走りに
聞き取れぬ防災無線秋暑し
御巢鷹の祈りの日数早星
カシュー塗乾く初風神楽笛
霧引かず雪加は川面巡回す
八月や軍事手帳に父のメモ
海の子の潜り納めや秋に入る
両腕に抱へ初採り西瓜かな
行水てふことにひかれて盥出す
提灯に子の名ずらりと地藏盆
初秋や川の暴るる音に覚め

谷口 文子
佐藤 慎一
田中 勝
碓氷 芳雄
石田 祥子
斎藤よし子
石原ゆき子
鴻坂 佳子
佐藤 聡
木村 静子
真下 章子
森川恵美子
丹羽 康夫
坂 利美
大野 邦夫
小堀 尚美
山口 容子
山田ミチ子
荒木 昭代
小川 妙子

2021年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

棟梁の耳に鉛筆梅雨明くる
鈴木家の柘榴たうたう伐られけり
新しき人移り住む青簾
仏壇の前に寝かせる南瓜かな
山鉾の建つや巡行なけれども
星飛ぶや母は戦中語らずも
外国名増ゆる礎石よ沖縄忌
野外映画ありし昭和や夕涼み
余生なほ祈る夏越の祓かな
七夕や病床に追ふ星の数
畑仕事の背ナを押すがに蟬時雨
糠床のとつぷり漬かる熱帯夜
峰雲へヤッホーと声大にして

大石 高典
中井 昭雄
鈴木 春菜
西村みゑ子
小嶌 和
志多伯節子
知念 幸子
中野 梓
長瀬 朋孝
福地 義雄
本多 智恵
山本 真也
山中ひでの

小袋の金魚揺らさぬよう家路	碓氷 芳雄
君が肩越しにそびゆる雲の峰	森 壹風
真夜中の木を見上げれば蛇そこに	田中 勝
片蔭にすつぽりと入る山の駅	真下 章子

茄子漬の色にこだはる売子ゐて	南田美恵子
畦道は母の通ひ路杜若	佐々木 成
火入れせる蕎麦の畑に虻出て	丹羽 康夫
夏草や一本道は鉄路跡	片山 旭星
歌声の夜空を仰ぐキャンプの火	櫛渕かりな
短夜や残り一行にて止まる	森川恵美子
葛餅の包みは心地よき重さ	城戸崎雅崇
白南風や恋路ヶ浜の芭蕉句碑	中村 順次
六根清浄御山は晴れて夏の富士	原田久仁一
木のうろを煽ぎ唸るは夏の蜂	宮原亜砂美
夕焼やころころ遊ぶ雀二羽	松澤 博子
一畝に起こされ惑ふ大蚯蚓	小堀 恭子
戸を開けて祭囃子を呼び込みぬ	小堀 尚美
夏山の重なり合うて三方五湖	田辺美千代
逝きし子と遊びし海よ夏が過ぐ	前田 鈴子
草むしり終の時まで続けたし	森 幸子
空蟬を探す子の目になり探す	石原ゆき子
蟬の殻潰さぬやうに両手出す	佐藤 慎一
金魚柄の暑中見舞よ青インク	石田 祥子
ヒロシマや炎天けふの太田川	小川 妙子

2021年9月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

夜の雷や回峰行者山に入る	栗本 徳子
金魚藻のゆらりと尾鰭あるごとし	朝田 玲子
五月晴破れデニムの膝小僧	仁田 浩
万緑の隙ひまにあり茜雲	小嶋 和
鳧鳴くや鎮守の森の中にまで	古川 邑秋
梅雨寒の細き灯流れ神田川	鴻坂 佳子
浸す手に疲れ消え去り夏の山	益子 桂子
桐の花あたりを祓ふごとくあり	中島 冬子
裏方は花殻摘みや菖蒲園	川上 和昭
女房の捌く釣果の鱈一尾	西村みゑ子
家籠り庭先に吊るハンモック	西五辻芳子

蟬鳴くや七十五年戦跡地	福地 義雄
額の花売物件の多い町	山本 真也
夫の摘む桑の実いつもジャムとなり	大野千鶴子
雨だれの落つる梅雨入の三和土かな	田中ミヨ子
一人とて会はぬ町なか枇杷熟るる	中野 梓
注射痕かすかに痛む梅雨寒し	森 すゞ子

きのふとは違ふ青田やこふのとり	森 幸子
昭和まだ生きてあるなり草田男忌	中井 昭雄
別人を気取るレースの手套かな	谷口 文子
校庭の白線薄れ梅の雨	碓氷 芳雄
じつとしてゐるも刻過ぐ蝸牛	大野 邦夫
降り続く雨は蒼しと七変化	田中 勝
閉校のプールめだかの学校に	山中ひでの
ででむしや探鳥会は息潜め	南田美恵子
運河行くボートのへさき犬の席	木村 静子
紫陽花やかくれんぼの子見えてをり	佐藤 聡
未草うたたねの間に咲きにけり	吉田 達哉
睡蓮や池の手本にモネの額	田辺美千代
さつき咲く四人となりしクラス会	中西 則雄
十分間待てず夕立のなかを行く	石原ゆき子
紫陽花や友禅型紙透かし見て	国兼 弓華
軟膏の手を逃げ回り汗疹の児	佐藤 慎一
鮎を焼く夫は香りを利きながら	細見 昌代
流螢やいつしか我も宙を舞ふ	山本 京子
古株を腰掛として木下闇	長瀬 朋孝
梅雨晴やロックカフェとふ赤い屋根	小川 妙子

2021年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

傷冷やす蛇口のしぶき夏隣	朝田 玲子
夏近し瀬戸をぬけゆく機帆船	仁田 浩
お浄土といふ岸へ向け泳ぐなり	川上 和昭
足跡のごとくサンダル散らばつて	鈴木 春菜
くたびれし牡丹の上に牡丹哉	大石 高典
草笛吹くたびに音色の異なりて	古川 邑秋
老鶯の声の入り来る坐禅堂	佐々木 成
露のみを残す子のゐてお弁当	三原真紀子
旧道の庇に初夏のとろろ飯	小嶋 和

さつぱ舟の竿の先まで新樹光	益子 桂子
整ひし田面の水に螻蛄のかほ	野木 正博
浜風や深紅の薔薇に王妃の名	植田 清子
蛙鳴く田の水をわがものとして	片山 旭星
篝火の闇にほひたつ栗の花	栗本 一代
風を捲くショールのごときさをがせ	志多伯節子
白玉や若かりし日は指白し	田崎セイ子
家猫の仔猫啜へて戻りけり	田中ミヨ子

語らずに去りし母なり沖縄忌	知念 幸子
生くることは大仕事なり聖母月	友永基美子
薔薇剪りて濡れたる袖に香の残り	長瀬 朋孝
いそいそと三分ほどなり燕の巢	西五辻芳子
幼ナの採る色づきかけしさくらんぼ	藤本 隆子
友は皆アルバムのなか新茶汲む	本多 智恵
葬送の道に寄り添ふ花蜜柑	前田 鈴子
その昔二階は蚕屋よ朴の花	真下 章子
医者通ひ段落のごと花あやめ	村木 道子
馬酔木咲く伊勢神宮の火除橋	森 すゞ子
振り向くでないぞと恃み青大将	宮原亜砂美
大樹なり戦後に植ゑし樟若葉	田中 勝
枝の目白籠の目白を誘ひ鳴く	田中ミヨ子
老の手も欲しきと言はれ茄子の苗	酒井 富子
溪谷に茶屋の在りしよ鮎の竿	森川恵美子
抽斗の滑りの軽し更衣	大野 邦夫
鶯の声だしぬけに野辺の道	中西 則雄
ほたる待つほたるの里のわらべ唄	山田ミチ子
打ち鳴らし青嶺に響くサヌカイト	林 剛
海峡の渦を隣に若布売	細見 昌代

2021年7月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

頬白の啼き交はしみて籠の鳥	川上 和昭
摘んで愛でつんで一と日を野に遊び	中島 冬子
藤咲くは平等院を一として	河村 純子
青麦に風紋つと急ぎをり	野木 正博
壺焼や身を回し抜く串加減	朝田 玲子
ちひさきを扱ひて夕餉の桜鯛	三原真紀子
新興地に昔偲べば蛙鳴く	中井 昭雄

たけのこ掘る今日の仕事と寺男	大野千鶴子
白詰草咲きて離宮は野辺めきぬ	片山 旭星
ゴンドラが空を行き交ひ山笑ふ	栗本 一代
鷺不動くるくる動く花筏	友永基美子
食べ頃は手が知つてをり豌豆摘む	西村みゑ子
春キャベツ手にやはらかき重さかな	森 すゞ子
子を訪ふに春の筍掘り上げて	森 幸子
東山の懐に入彼岸かな	古川 邑秋
鐘鳴るや修二会の衆の走る音	西五辻芳子
新入社員用心棒の面構へ	吉田 達哉

玄関の灯しに浮かぶ染卵	丹羽 康夫
目借どき手の甲つねり会議中	森 壹風
轉やピザ伸す板は大理石	木村 静子
初心者の田起し見張る鷺と鳩	宮原亜砂美
オルガンの音懐かしむチューリップ	酒井 富子
電線の高所作業車風光る	益子 桂子
妙義山の岩場重なり八重桜	森川恵美子
花換や金の烏帽子の福娘	小堀 恭子
花筏分けて汲み取る供へ水	田辺美千代
針金と紛ふまで干す蕨かな	前田 鈴子
苗床の競ふごとくに二百箱	山口 容子
朧夜の影のら猫の遠慮げに	山田ミチ子
海しづか妻が舵取る浅蜷舟	山中ひでの
轉や反り返る児の歯の白し	佐藤 慎一
競ひ立つビルは黄砂に巻かれをり	林 剛
桜咲く一の舟入舟は朽ち	細見 昌代
春寒し人事異動の胸騒ぎ	石田 祥子
居ながらに雲雀のこゑを聞く職場	塚本 郁子
灯台の足場守りか犬ふぐり	田崎セイ子
池の鯉数ふる日課水温む	田中ミヨ子

2021年6月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

啓蟄や都会に老いて虫怖し	仁田 浩
仔を背負ひクモザル春の空渡る	小畠 和
踏ん張るぞモッチョム岳の春疾風	野木 正博
草餅を搗く掛声や湯気の跳ね	古川 邑秋
つちふるや昔の話ぶり返し	富沢 壽勇

対の貝をさなと描く貝合	西五辻芳子
木のうろの深きしづけさ春の雨	朝田 玲子
芝青む古墳のぬしの名は知らず	川上 和昭
縄締め土のこぼるる植木市	中井 昭雄
一湾に動かぬ基地や松の芯	志多伯節子
すみつこに稚のを見つけし年の豆	中野 梓
嫁ぎ来し時より門の桃の花	森 幸子
海棠に雨戸閉ざす手滞る	村木 道子
涅槃像にぬかづく母の背ナまろし	佐々木 成
梅日和ひねもす猫とのたりゐて	河村 純子
椿落つる音に仔猫の身構へて	小川 妙子
囀は窓の外よりラジオより	石原ゆき子

鶯のこゑに雀に枝の揺れ	田中 勝
笑ひ声校舎に戻り金盞花	宮原亜砂美
囀りのなかよ新聞めくる朝	小堀 恭子
だしぬけのやかんの笛よ花曇	木村 静子
須弥壇に二十五輪の椿かな	片山 旭星
春昼や尻尾枕に猫丸む	櫛淵かりな
在宅の仕事の日々や花曇	佐藤 聡
ビルつなぐ回廊のあり春の川	城戸崎雅崇
淡き香を放つよ椿落つるとき	中村 順次
末つ子は末つ子同士目刺焼く	吉田 達哉
昨日になき土筆ありけり避けて行く	小堀 尚美
大地割れ飛び出す蛙ひとつ飛び	田辺美千代
亀二匹うろに隠れて春の川	中西 則雄
野遊びや二歳に影の不思議あり	前田 鈴子
父の植ゑし木瓜の花なり声かけて	山口 容子
夕霞む湾をゆるがす汽笛かな	山中ひでの
春の日や一つ飛ばしの石畳	笹田 昌孝
鐘霞む古墳築きし国のこと	林 剛
比良八荒湖面に雲の迫り来る	細見 昌代
火砕流に焼けし田畑よ蕨萌ゆ	杉本 伸一

2021年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

雪下し疲れし村を星の数	佐々木 成
梅が香をまづ呼び込んで厨ごと	中島 冬子
子規が居し漱石が居し伊予の春	川上 和昭

小浜湾へ釣糸垂るる春の風	野木 正博
明日香よりの春の摘菜のほろ苦し	栗本 一代
風音を聞き酌む酒よ春寒し	片山 旭星
大寒や山羊鳴いてゐる河川敷	志多伯節子
卓上に消しゴム屑や受験終ふ	立石 律子
春の波閑けき浜に我一人	知念 幸子
花の種蒔いて花の名忘れけり	友永基美子
春や春手提げ鞆の重くなり	中井 昭雄
薔薇の芽のアーチに上がる息吹かな	長瀬 朋孝
閉校の庭に球音春きざす	中野 梓
次々と耕されゆく干拓田	藤本 隆子
笹鳴を参拝客の探しゐる	森 すゞ子
浅春の橋に欄干なかりけり	南田惠美子
縫ひかけの刺繍広げむ梅月夜	朝田 玲子

ヒヤシンス私の時間あと五分	真下 章子
杉戸絵の唐子戯れうらけし	木村 静子
干からびし贅の枝揺れ春の雨	宮原亜砂美
鹿の息あり飛火野に寒戻る	古川 邑秋
おしくらまんぢゆう誰となく増ゆる	西五辻芳子
冴返る鼻のつるりと大天狗	益子 桂子
暇乞ひして去り難し梅の庭	酒井 富子
梅咲くや崖屋造の宿場町	森川惠美子
寒雷や欠けたるパズル埋むたび	斎藤よし子
茅葺のころのありけり露の臺	大野 邦夫
豆まきや当てられにゆく鬼の役	小堀 尚美
唄ふたび春のうるほふ早春賦	田辺美千代
作柄の良し悪し探る梅見かな	前田 鈴子
梅の剪定昔どおりよ黙々と	森 幸子
歩まねば老ゆると誘ふつばくらめ	山中ひでの
節分や檜葉の煙の猛々し	石原ゆき子
冬ざれや遺る仏に仮の宿	林 剛
ふらここや子らに届かぬ母の声	南田美惠子
大人味とぞ鯛飯に山椒の芽	石田 祥子
目白来る餌に一羽来て守る一羽	本多 智恵

2021年4月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

西行の詠みし桜の返り花

佐々木 成

棒鱈を戻す日数や年の暮
伊勢道や牡蠣と干物を買初に
夫の友なりと賀状に馴染みけり
新しき箸置に箸置く二日
雪解の流れ一筋雲母坂
ふるさとはいま菜種咲く仁淀川
日めくりの元日おらが一茶の句
鳥鳴くに岬は晴れず小豆粥
鬼の子の冬は何処や目文字なし
積む雪を吹きとばしたり漁場の風
生かされて生きて九十二今朝の春
縫初のきりりと張りぬ刺繍台
冬帽に車窓の風や参考書
腹ペこの栗鼠のあつまる枯木立
広島や牡蠣の外せぬ雑煮椀
褻着なれど過ぎてゆくなり松の内

栗本 徳子
三原真紀子
朝田 玲子
鈴木 春菜
片山 旭星
栗本 一代
酒井 富子
志多伯節子
友永基美子
中井 昭雄
長瀬 朋孝
西五辻芳子
碓氷 芳雄
宮原亜砂美
田中 勝
富沢 壽勇

洞門の昏さ駅伝走者抜け
もう少し生きてみようか桜餅
牡蠣割りし父の破顔や夕餉の香
ローカル線の扉開くたび寒四郎
観覧車動かざると雪催
春待つや電話診察受けてみて
凍結に低速となりスポーツカー
隙間風閉ぢこめらるるより易し
元日やよそゆきなれど家に在り
破魔矢受く若狭国の一の宮
真夜中の天井揺るる雪起し
湯豆腐のゆらりゆらりと角の数
いつもなり寺の法事の隙間風
画面越しの講演を聴き冬籠
一月や酒饅頭の湯気旨し
さよならを百回言へば雪ちらちら
鴨三羽羽搏ち波打ち日射し濃く
顔洗ふ猫は初湯の蓋の上
新玉の年や餃子を包む愚痴
駅伝のあとの勢ひ筆始

小嶋 和
斎藤よし子
牧田満知子
森川恵美子
城戸崎雅崇
中村 順次
吉田 達哉
坂 利美
森 幸子
山田ミチ子
大野 邦夫
田辺美千代
荒木 昭代
石原ゆき子
大野千鶴子
小川 豊子
石田 祥子
小川 妙子
中野 悦子
山本 京子

2021年3月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

白息をととのへてより案内乞ふ
くつさめにくさめ餅す夜のしじま
清き水飲めぬ国あり寒北斗
牡丹焚く炎みちのくとほきとも
木枯や母国に帰る老神父
冬苺ほろほろ零しかくれんぼ
旅人の歌の檜の木冴ゆる鞆の浦
小春日の遠音は叡山よりの鐘
手の届くところに寒の芹を見て
家籠り着ぶくれ癖のつきにけり
点滴のままならぬ夜の寒さかな
マリ国の藍染の布あたたかし
重ね着の身をほどきけり通夜の席
いづこの国より来し波か小春空
灯火管制鼻鳴けば妹が泣き
殿の一羽ちひさし鳥渡る
冬枯の鉄路の音よ街の灯よ

仁田 浩
富沢 壽勇
古川 邑秋
西五辻芳子
佐々木 成
前田 鈴子
木村 静子
野木 正博
南田恵美子
山中ひでの
加藤かず子
栗本 一代
田崎セイ子
知念 幸子
友永基美子
中野 梓
碓氷 芳雄

湯気立ててにはかに歳を取る心地
遠眺む愛宕比叡に雪のあり
白味噌の好きな父亡き今朝の春
妻にやたら話しかけゐて年の暮
歳晩やカーラジオよりヒット曲
大雪のニュースに町の名の馳せて
山茶花のこぼれて白き背戸屋道
山眠るたたら製鉄よみがへり
湯の中の柚子お手玉に高く高く
奥多摩や地藏堂にも聖樹立つ
ふるさとは霜踏む山のその先に
猫代りと毛皮のコートそばに置き
代替り重ねし庭の小雪かな
お帰りの声にほどけし寒さかな
冬の雷いのち打ち込む能面師
水柱冬日を散らしたたき漁
父いつも横座に居たり囲炉裏端
こんなにも晴れてゐる日よ葱刻む
水漬や子のぐいと立つ目の力
クリスマス高層ビルは灯の柱

真下 章子
藤本 隆子
三原真紀子
林 剛
田中 勝
酒井 富子
杉本 伸一
森川恵美子
斎藤よし子
城戸崎雅崇
中村 順次
松澤 博子
坂 利美
大野 邦夫
小堀 尚美
田辺美千代
森 幸子
石原ゆき子
佐藤 慎一
志多伯節子

2021年2月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

川音のいささか固し冬に入る	栗本 徳子
そのうちの一つは母へ木守柿	仁田 浩
病棟に母取られしよ冬の鴟	朝田 玲子
棘抜きは夫が待みの小春かな	西村みゑ子
戸を叩くは木枯しのみぞ主逝き	森 幸子
大水害の町史に遺る野分かな	川上 和昭
晩秋の湖面は白し余呉の湖	栗本 一代
白菊に囲まれ戦越えし人	加藤かず子
難民の子らにあげたし小春空	田崎セイ子
水一杯コーヒー一杯冬はじめ	知念 幸子
柊の花の香棘を忘れさせ	友永基美子
日向ぼこ猫の丸みに添うて撫で	中井 昭雄
冬夕焼天へ蹴上ぐる薫草履	前田 鈴子
目覚しを使はぬ暮し室の花	真下 章子
木の葉髪少しのおしやれゆるされよ	森 すゞ子
原木の競りのあとなる冬野かな	小罵 和
百舌鳴くや撮影待ちの侍に	河村 純子

穠穂の風吹き渡る干拓田	佐々木 成
球根に庭の未来凶小春風	益子 桂子
雁行と同じ空ゆく旅路かな	宮原亜砂美
なあんにもお返し出来ず星月夜	斎藤よし子
野ぎつねの密会らしき枯芒	南田美恵子
雪吊を広き寺領の要とす	長浜 利子
枯菊を刈りつつ香り惜しみけり	酒井 富子
初霜や下仁田葱の甘さ増し	森川恵美子
日差しきて色よみがへる秋の海	城戸崎雅崇
翁忌の湖たどり損ねたり	富沢 壽勇
般若経写し仏間の秋惜しむ	山中ひでの
身軽さは庭師の備へ冬構	坂 利美
画仙紙に墨走らすや冬ぬくし	田辺美千代
舟小屋に風遊ばせて蔦紅葉	山口 容子
腹減らすための散歩や冬浅き	齋藤 耐
夜神楽や神話の世とてありありと	荒木 昭代
冬支度屋根より下へ声の飛ぶ	大野千鶴子
水替へや金魚に詫ぶる冬の池	川村 真治
潜伏の祈りの島や石菫の花	杉本 伸一

蕎麦の花やがて蕎麦粉となりぬべし 田崎セイ子

2021年1月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

燠細し終ひのときの芋煮会	仁田 浩
名月よ二重に見ゆるわが視力	川上 和昭
柿が顔に触るる近さよ鞍の上	朝田 玲子
恋しさが寂しさとなる夜半の秋	小島 和
萩焼や上臈といふ杜鵑草	栗本 徳子
留袖の重さを肩に秋の空	鈴木 春菜
金網を繕うてをり蔦紅葉	古川 邑秋
天高し城址名残りの石の数	富沢 壽勇
積上げしものの崩るる冬用意	中井 昭雄
ハロウィン名残の月を明りとし	西五辻芳子
枯萩やのぼりつめれば阿弥陀仏	栗本 一代
ひとり居の芯の芯まで虫の闇	木村 静子
秋の日や病院に置く出土壺	酒井 富子
日の射して歪み親しき榎櫃の実	長瀬 朋孝
身に沁むや新品のまま古ぶ物	中野 梓
山国や熊の冬眠またれをり	長浜 利子
灰が消すとかオリーブの実の苦さ	西村みゑ子

熊の檻の空ラのままなり通草熟る	真下 章子
晩稲刈り母は頭をもて田舟押す	森 幸子
比叡より出で十六夜が雲照らす	片山 旭星
熊笹の尾根や脚絆の露払ひ	野木 正博
舟小屋に風遊ばせて蔦紅葉	山口 容子
秋夕映ビルの隙間の乱反射	碓氷 芳雄
秋うらら路地に迷うてもつこ橋	宮原亜砂美
踏まれたる落葉また踏む朝の道	澤田 陽代
草深く揺れ風にゆれ猫じやらし	櫛淵かりな
庭の柿かじりし頃の丸坊主	中村 順次
秋深し鎌を箒に変へる頃	松澤 博子
マスクして眉濃く太く引きにけり	坂 利美
霧深しもののけひそむごとくなり	小堀 恭子
鬼灯や鳴る子鳴らぬ子鳴らさぬ子	小堀 尚美
投げ釣りの鋭き音や照紅葉	齋藤 耐
くまげらの居場所教へぬマタギかな	荒木 昭代
栗拾ふ縄文人の心地して	石原ゆき子

新米五キロ娘七キロずつしりと	佐藤 慎一
鶯鳥鳴くお伽噺や十二月	山中伊蘭子
栗拾ふ山のけものと分けあうて	杉本 伸一

2020年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

吾が肩に一蹴り入れて蟋蟀逃ぐ	吉田多々詩
扇風機壊れてなほも首を振る	大石 高典
見事なる木通に棹があと少し	仁田 浩
日の射すや桐の実の鳴る午さがり	中島 冬子
蟋蟀の子跳ぶに目測を誤てり	羽鳥 正子
東天の雲の多さよ秋澄めり	中井 昭雄
出征の学徒の句集秋時雨	植田 清子
長身の盆僧かがみ入る座敷	真下 章子
宿を守る軒端軒端の貴船菊	河村 純子
虫の音を酒の肴に未だ寝ねず	朝田 玲子
燕帰る大河の橋の真上行き	古川 邑秋
音愉し青げらの打つ樵大樹	佐々木 成
湖に秋の日が画く波の綺羅	渋谷 啓子
虫の音やはうと息吐く仕舞風呂	谷口 文子
鶉とまたたびの実を奪ひ合ふ	鳥居 裕子
落日や鴉に揺るる里の秋	碓氷 芳雄
本日は晴天なりと震災日	長浜 利子

裏返り風を生み出す風知草	福 のり子
十一の吊橋渡り滝巡る	野木 正博
川いまだ台風濁り肥後平野	中村 順次
ねこじやらし供花に加へて風にはか	益子 桂子
片づけに宝出たると盆の家	松澤 博子
おかへりか話においで盆じやもの	坂 利美
ぽつりまたぽつりと話す秋灯下	大野 邦夫
澄む水の流れに揺るるかづら橋	小堀 恭子
一雨を待ちて大根蒔きにけり	森 幸子
秋晴れに夫と一日を田に過ごす	山口 容子
ひやひやとして薄布団かき寄する	山田ミチ子
灯下親し二つの眼鏡使ひ分け	山中ひでの
旅公告見かけぬ電車秋気澄む	齋藤 耐
新涼や風呂の温度を二度上げて	石原ゆき子
檻の鶉の横一列ぞ秋暑し	南田美恵子

セイレンの誘ひか台風来たる海	山中伊蘭子
東西の国を一つの地図や秋	三原真紀子
反戦歌途絶へし街や秋夕焼	牧田満知子
ピースてふその名の重き秋薔薇	長瀬 朋孝
秋鯖やはや撓りたる妻の竿	田中 勝

2020年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

陸にある千石船や雁渡し	宮澤 淑子
八万本の向日葵密に競ひ合ひ	中嶋 文子
刈られても刈られてもま芒なり	大石 高典
非常食買ひ足す日なり震災忌	羽鳥 正子
腹立つるなど妣の口癖虫時雨	酒井 富子
搾乳の始まる牧舎朝郭公	佐々木 成
悲しみを笑ふ吾れ在りちちろ鳴く	友永基美子
今朝秋の川に流れの戻りけり	古川 邑秋
氷片をグラスに浮かべ秋に入る	吉田多々詩
椰子の実と写れる父よ終戦日	鴻坂 佳子
銅の鍋すべて祖母より星月夜	川上 和昭
大梁に音しゆるしゆると青大将	益子 桂子
京都駅ゼロ番線の風が死す	山本 真也
逢ひたさに空見上ぐれば星流る	植田 清子
疎開児みな老境となり星月夜	加藤かず子
秋灯や基地の中なる母の墓	志多伯節子

原爆忌歪む砥石に刃先あて	立石 律子
遠隔会議失敗重ね秋立ちぬ	中井 昭雄
一念の写経の夏書納めけり	長瀬 朋孝
野に還る農地のふゆる稲田道	中野 梓
小ぶりとして旨さは負けぬ島バナナ	福地 義雄
湖に何か跳ねたる残暑かな	真下 章子
白鷺を呼び込むごとき稲穂波	山中ひでの
走る子に浜辺は秋の色となる	川内 麻美
太陽を背負ひ出でたる青蜥蜴	富沢 壽勇
羽化終へし蟬は萌黄のいろの武者	牧田満知子
下仁田葱植ゑ替ふる残暑かな	森川恵美子
地球儀へえいと向けたる扇風機	河村 純子
土地の言葉もどりにて浜の夏終る	仁田 浩
朝顔に潮風しるき日なりけり	川内 一浩

谷筋を行ったり来たり鬼やんま	野木 正博
パトカーの後ろについて秋暑し	小堀 恭子
虫のこゑ付箋ふえゆく新句集	西五辻芳子
いにしへの姫も好いたり氷水	斎藤よし子
良寛の書に見惚れゐて小鳥来る	中村 順次
蟬時雨七十五年蟬時雨	田中 勝

2020年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

木天蓼の花や昼より灯す道	酒井 富子
鉢植のバジルに目あり雨蛙	中嶋 文子
水底に舞ひ立つきらら清水汲む	吉田多々詩
水の輪を崩し合ひをる水馬	南田美恵子
生まるる者逝く者ありて蟻の列	友永基美子
祇園囃子なき宵山や校了す	中島 冬子
退院の帰途にてくぐる茅の輪かな	大野千鶴子
嵯峨野なり定家かづらに出会ひしは	田崎セイ子
荒ぶる世に軒の風鈴鳴りしきる	長瀬 朋孝
手旗振り機関車後走月見草	仁田 浩
達磨寺の落し文ゆゑ拾はずに	真下 章子
芥子ほどな黒目すいすい目高の子	益子 桂子
四つ角を曲がりて涼し蔵の町	森 すゞ子
辻の祠その仏めく梅雨茸	山中ひでの
海越えて届く声あり梅雨の朝	小寫 和
貨物列車どごとと停まる戻り梅雨	齋藤 耐
鳩居堂の香や銀座の秋めきぬ	鴻坂 佳子

緑陰や姿を見せぬ鳥の声	川内 麻美
端居してこころの置き処この辺り	山本 京子
夏萩や道に迫り出す山の岩	石田 祥子
切火して読経始まる土用灸	長浜 利子
梅雨明や窓枠はやも熱を帯び	羽鳥 正子
芋畑へいつしか出来しけもの道	中村 順次
七夕の夜半に雨風つのりけり	城戸崎雅崇
見なれたる山に重たく梅雨の雲	鈴木和香子
風渡る同じ青田に同じ鷺	丹羽 康夫
阿寒湖にウポポの響く夏の夕	宮原亜砂美
炎天に軒の瓦きしみけり	大野 邦夫
雲影が青墨のごと夏の山	小堀 恭子

縁側の夏日や父の指定席	小堀 尚美
夏草やだんだん小さくなる私	前田 鈴子
梅農家あまさず実梅使ひきり	森 幸子
籠持つて帰りはおんぶ蚩狩	山口 容子
鳴く蟬に雲はいよいよ高くなり	林 剛
夏の日や青差し色に装うて	細見 昌代
持ち家に身を縛られてかたつむり	牧田満知子
七夕の願ひ豪雨に流されて	小川 妙子

2020年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

長崎の種が大樹に枇杷実る	渋谷 啓子
白虎洞よりの出口の苔茂る	中嶋 文子
崖見えぬ越後の国の植田かな	佐々木 成
風待月今宵寄道せず帰る	中井 昭雄
余り苗あたかも鬼門守るごと	古川 邑秋
子どもより傘より高く蚩飛ぶ	鈴木 春菜
胡瓜揉む緊急事態宣言下	山本 真也
ませ棒の穴の擦れ跡額の花	羽鳥 正子
良薬は苦しと梅を煮詰めけり	森 すゞ子
桑の実や昭和の路地は土のいろ	吉田多々詩
一事とて秘めてはできぬ辣蕪漬	南田美恵子
一燭に爽やぐ指よ伎芸天	栗本 一代
若き日の悪夢忘れじ梅雨出水	荒木 照代
母もとへこの虹の橋渡りたき	田崎セイ子
泣くもんか眼ん球だつて汗をかく	友永基美子
黒南風や牛は牛舎を出たがらず	仁田 浩
マスクなきは遺影のみなり慰霊の日	福地 義雄

串打たぬ鮎の素朴さ網の上	朝田 玲子
左京区の片隅に居る慕の恋	福田 将矢
雨安居やぐぐぐぐぐと背伸びして	富沢 壽勇
遅き日や雲一筋の羽田行	碓氷 芳雄
豌豆伸びろ空に居るとふ巨人まで	中野 悦子
植田一面浮かぶがごとく島田宿	大石 高典
万緑の濃き香り立つ貴船かな	片山 旭星
青梅の痩せて寄り合ふ瓶の中	河村 純子
頼もしき介護の腕が紫蘇をもむ	前田 鈴子
戻り来てもまだ居座りぬはたた神	真下 章子

炎天やみじろぎもせぬ警備員	佐藤 聡
梅雨寒の泣き顔映る窓ガラス	鈴木和香子
蓮の葉の水滴揺るる朝の鐘	宮原亜砂美
梅雨入や毎朝顔を洗ふ猫	吉田 達哉
薔薇咲くや剪らぬと決めて眺めをり	小堀 尚美
新じやがの小さきは婆の煮ころがし	森 幸子
乳せがむ子に父の汗無力なり	佐藤 慎一
街路樹の杏をジャムに街起し	石田 祥子

2020年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

どの家も栗の花咲く京丹波	中島 冬子
急ぎ剪る雨のにほひの白薔薇	栗本 徳子
村の名は長者屋敷よ松の芯	佐々木 成
蓴菜や声に零るる独り言	河村 純子
身をふせて橋くぐる舟花檣	宮澤 淑子
窓際を離れて座る真夜の雷	川内 一浩
独りとて都会の家のハンモック	大石 高典
消毒と言ひ夫の酌む冷し酒	西五辻芳子
たけのこのいのちの重さたづさへて	栗本 一代
使用不可とふ公園の五月晴	大野千鶴子
見栄張つていつも空腹こひのぼり	友永基美子
蜘蛛の囿の揺れて雨粒光りけり	中井 昭雄
豆飯や猟銃の音二三発	真下 章子
緑陰やかくれんぼして忘れられ	川内 麻美
こどもの日庭はテントに占拠され	中嶋 文子
若き部下逝きし五月の来たりけり	古川 邑秋
蜘蛛の囿を払ひ朝一番の山	野木 正博

花えごの香りて白を探る闇	朝田 玲子
新緑の街透き通るにはか雨	碓氷 芳雄
柵越しに触れてみたきよ月見草	富沢 壽勇
お日様に目覚め後るる立夏かな	石原ゆき子
用水へ分水つづく夏の川	羽鳥 正子
薔薇一輪対し大きく息ひとつ	斎藤よし子
籠り居の窓に新樹の迫りくる	南田美恵子
初夏やこずゑ揺らして影揺らし	片山 旭星
トロ箱に尾ひれはみ出し初鯉	佐藤 聡
藤棚や風は花房くぐり抜け	櫛淵かりな

毛繕ふ猫に筍流しかな	長浜 利子
苜蓿いまだ毒消し見つからぬ	堀口 忠男
下仁田の段丘どこも葱坊主	森川恵美子
水鉄砲は竹鉄砲よ幼き日	城戸崎雅崇
菖蒲湯を合戦場と幼たち	鈴木和香子
新幹線の車体の走る代田かな	丹羽 康夫
地形図を読み旅ごこち夏立ちぬ	大野 邦夫
花曇り母は小さき寢息立て	小堀 尚美
薔薇を持つ少女はせりふ言ふやうに	山田ミチ子
腰据ゑて太き玉葱引っこ抜く	長瀬 朋孝

2020年7月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

水 筍 集

摘みに来よと土手に土筆の立上がる	中島 冬子
坂道の上の我が家へ春の月	鈴木 春菜
春の野や一人の刻を引き延ばす	古川 邑秋
花冷や体温計に耳さとし	中嶋 文子
佐保姫の情けある風遊びたし	河村 純子
揚雲雀やはり眼鏡をかへませう	仁田 浩
青空は若き日のあを花水木	川内 一浩
切通しの小流れ堰くは落椿	宮澤 淑子
山独活のこぼす大地のにはひけり	羽鳥 正子
湘南の風の帽子や春夕焼け	川内 麻美
春眠の耳より覚めて夢のなか	渋谷 啓子
蒔絵師の祖父の絵柄や光悦忌	中井 昭雄
鯉のぼり風に本気の見えにけり	木村 静子
水温む世間話をしてゐる間	山本 真也
摘みたての水の匂ひの芹の束	植田 清子
集合地は徒歩にて五分花筵	長浜 利子
干物乾し終はらぬ内に蠅生る	大石 高典

野良猫の跨いで通る名草の芽	友永基美子
野薊を踏まぬやうにと牛動く	川上 和昭
風の道避け南瓜蒔く山の畑	益子 桂子
結多き集落の田や蝻の道	吉田多々詩
新しき土の香まとひ畑を打つ	佐々木 成
春の土窪むところの烏骨鶏	福田 将矢
春の門清めて閉ざす若き僧	林 剛
夕日なかすいすいすいと初燕	野木 正博

一輛に乗客一人八重桜	益子 桂子
東雲の真白に浮ぶ桜かな	櫛淵かりな
百年の天より降りて山桜	朝田 玲子
英傑の稚き眉目五月雛	中野 梓
足音の水脈の乱るる春の鴨	田辺美千代
座禅草おのれ信ずる方を向き	大野 邦夫
たんぽぽの絮飛びゆけり雲の無礙	西五辻芳子
順番に抜いてくれよと葱坊主	丹羽 康夫
城山と謂ふ裏山の百千鳥	酒井 富子
夕闇や花筏みな接岸す	城戸崎雅崇
小さき手に躑躅の蜜の甘きこと	田中 勝
たんぽぽや往復二里の通学路	森 幸子

2020年6月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

疫病へ関の声あり竜天に	仁田 浩
能役者閑にて候春の月	河村 純子
子規の着たる縞の端切れやあたたかし	木村 静子
蒲公英の絮行く先を風が告げ	川内 一浩
ものの芽のほぐるるにほひ雨近し	中島 冬子
ルワンダの丘いつばいの茶摘かな	大石 高典
權先の光る水面や真菰の芽	益子 桂子
三月や置葉屋の大きな荷	長浜 利子
明日は引く白鳥のこゑ沼にあり	佐々木 成
仲春の雲居の高さありにけり	渋谷 啓子
ことづてをしたき人あり鳥帰る	古川 邑秋
古墳より大和国原春霞	栗本 一代
青年は春寒の書齋を好む	山本 真也
子の家へ出張のごと雛飾る	立石 律子
縄電車通り過ぐるぞ落椿	大野千鶴子
吊橋の向かう紀の国水温む	西村みゑ子
幼少の吾に父の墓お中日	中嶋 文子

春炬燵午後は録画のチャップリン	植田 清子
蝌蚪太る池に抜け穴抜くる水	福田 将矢
跳ねずにはをられぬ春の駒若き	朝田 玲子
息すれば窓くもらする春の雪	川内 麻美
北嶺の雪の別れや電車待つ	齋藤 耐
護摩壇の火勢極まる水送り	小堀 恭子

野遊びや薄暮に五重塔の先	林 剛
山門の脇をかためて紫木蓮	城戸崎雅崇
啓蟄や亀の飼育の箱洗ひ	南田美恵子
登り来て春の匂ひの比叡山	野木 正博
春暁や推しはかりゐる震源地	鴻坂 佳子
銅像の矢を射る構へ風光る	真下 章子
祖母の手がほつれ繕ふ雛衣装	鈴木和香子
一日を男寡黙に畑を打つ	田辺美千代
小流れの石につまづく落椿	前田 鈴子
赤道一周四万キロぞつばくらめ	森 幸子
篝火に清流踊る水送り	吉田多々詩
門の札の疫病封じ春の風	西五辻芳子
三月の予定帳より文字の消え	石田 祥子
土筆摘む日暮れて子等の影絵めく	小川 妙子

2020年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

手焙に鬘や烏帽子や撮影所	中嶋 文子
降る雪や位牌ひしめく家を守り	河村 純子
遠火事やうちは愛宕の火伏札	仁田 浩
雨に濡れイエスも濡れて踏絵板	川内 一浩
お松明打降る火の粉虚空まで	栗本 一代
青みある紅梅の香の昏れてなほ	栗本 徳子
山門へつらつら椿のぼる坂	中島 冬子
床の間に掛け春を待つ貫主の書	植田 清子
春兆す師と仰ぐ人病癒ゆ	加藤かず子
観梅の弁当重し山の道	田崎セイ子
浅春や「売家」と書けど貼り出せず	友永基美子
冴返るとは運休の観覧車	福田 将矢
雀の巢見えず雀のいつもゐる	鴻坂 佳子
アイゼンの爪に探りて踏み返す	野木 正博
中天の月たそがれの春時雨	片山 旭星
臨月の馬モニターに見る隴	朝田 玲子
池の底に泥の道あり水温む	吉田多々詩

頑なに閉ぢし牡蠣より子蟹出て	宮原亜砂美
牡蠣鍋や故郷へ急ぐ道すがら	碓氷 芳雄
春近し水を治めし王の塚	林 剛
春遠き蛇の眠れる谷の底	小川 妙子

もう少し寝かせてやるか春寒し	三原真紀子
やはらかな子の手のひらや貝の雛	山本 京子
春めくや電車のベルがおつとりと	佐藤 聡
明け方の時を劈く雉かな	羽鳥 正子
夜も更けてまぶしより取る春蚕かな	森川恵美子
屋上につづく公園冬の薔薇	城戸崎雅崇
かき抱く湯たんぽ幼な子のごとく	斎藤よし子
風光る千住の駅の芭蕉像	中村 順次
寒月に薨の光る家路かな	富沢 壽勇
夜咄や胡麻竹柱主役とす	松澤 博子
父逝きし日のごと降り春の雪	大野 邦夫
春光や人なきときの赤信号	小堀 恭子
雨粒をまとひて木々の風光る	田辺美千代
春まけて水筒の白湯飲み難し	齋藤 耐
春興の寄り道多き遊歩かな	長瀬 朋孝
川の面の小鮒を狙ふ鴉かな	田中ミヨ子

2020年4月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

副虹のくつきり見ゆる片時雨	南田美恵子
出来不出来まるく納めて鏡餅	中野 梓
下萌の雨後の湯気上げ土竜塚	羽鳥 正子
山頂に紫雲従へ初日の出	荒木 昭代
いつしかに服薬の増え去年今年	植田 清子
餅搗きや道具揃へて人揃へ	大野千鶴子
冬晴の六甲山頂海光る	加藤かず子
父のみが遺影モノクロ冬座敷	川上 和昭
くもりガラスに臘梅のけふる朝	栗本 一代
大寒の句も厚きまま峽の昏れ	酒井 富子
凍つる夜や万年筆のインクさへ	田崎セイ子
若水をまづ鉄瓶にみたしけり	田中ミヨ子
餅搗の杵の音軽し堀の内	西五辻芳子
福引の八角箱を年の市	仁田 浩
鬼餅も買って供へる世となりぬ	福地 義雄
戦時下の飛行場跡麦青む	本多 智恵
鐘の音を枕に寄せて初昔	益子 桂子
鏡餅のちの楽しき昼餉どき	村木 道子

仕事始め冷氣満ちたるビルの中	林 剛
木枯や影踏みの子の息はづみ	佐藤 聡
瞬きをする間も積り村の雪	佐々木 成
着膨れやこの楽章のここが好き	福田 将矢
約束を一つ果たして初日記	中嶋 文子
古地図展ひとり見てゐる春隣	羽鳥 正子
大空に舞ふめ組の「め」出初式	田中 勝
内股に歩む鶴鴿初氷	堀口 忠男
薪窯のピザ焼きあがる三日かな	野木 正博
餅箱といふものありき小晦日	朝田 玲子
冬霞我が家は宙に浮く如し	山本 京子
猪鍋のそこに隠れてゐる明日	谷口 文子
がき大将青き蜜柑を好みけり	斎藤よし子
蓮根掘る泥の中へとトラクター	石田 祥子
近づけば壊るる薄さ初氷	前田 鈴子
湯豆腐の煮ゆるを待たず盃重ね	片山 旭星
明けやらぬうち登校す寒稽古	藤本 隆子
些かのご神酒を撒き農始	長瀬 朋孝
快晴の空へ逆立ち出初式	碓氷 芳雄

2020年3月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

僧堂の寂莫として臘八会	栗本 徳子
枯蔓を足踏ん張つて引けば空	中島 冬子
掛取りも死語となりたり年の暮	中井 昭雄
鳥追の太鼓が村の闇ゆする	佐々木 成
落葉ほの甘き匂ひや漱石忌	川内 一浩
金糸魚にふるさと遠し鱗搔く	羽鳥 正子
木の葉散る原爆供養塔の上	宮澤 淑子
野木さんが来いと言つたら小鳥来る	山本 真也
星冴ゆる帰路や余韻のアベマリア	植田 清子
ウガンダの椀に零余子のをさまりぬ	栗本 一代
寒柝の廃止に音のひとつ減る	酒井 富子
ゴスペルの初めはクリスマスソング	立石 律子
夜勤の子帰る時刻や霜踏む音	田中ミヨ子
夢殿や翅ととのへて蝶凍つる	西五辻芳子
猪鍋の湯気に向かうは恋のこと	小嶋 和
天に舞ふめ組のしるし出初式	田中 勝
紋柄に見覚えのある鶴来る	堀口 忠男

脱がせたる馬着の湿り冬ぬくし	朝田 玲子
鐘冴ゆや国境描かぬ世界地図	中嶋 文子
暖突にあくびぼはりと冬の蛇	福田 将矢
水潤るや暴れたるあの千曲川	長浜 利子
時雨雲歩み止めては子が眺め	石神 主水
教皇の禱りに冬の雨しとど	鴻坂 佳子
冬晴の汽笛が六甲山昇る	野木 正博
温室に封じて花の香の甘き	南田美恵子
大声に叫びたき日や空つ風	真下 章子
ボンネットに猫の足跡漱石忌	益子 桂子
水害に岩の苔消ゆ冬景色	森川恵美子
山眠る溪谷の水音もなく	佐藤 聡
雲間より朝の富士見ゆ冬支度	池谷 千波
砂防堤の川底高し紅葉散る	丹羽 康夫
夫にも覚えてもらふ年用意	中野 梓
赤紙を語る人減り十二月	山中ひでの
大根干す天文台の賄ひに	石原ゆき子
ノウマン象地底深くに嶺の雪	林 剛
座敷とて鯛炙るに江戸火鉢	山中伊蘭子
小春日や祖父に教はる竹とんぼ	碓氷 芳雄

2020年2月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

近寄ればここも手向けの通草の実	栗本 一代
代々の揺籠戻る障子の間	中嶋 文子
鶉の来て鳴きし大樹を伐られけり	荒木 昭代
冬めきて湖面の反射率低下	古川 邑秋
空也忌や五尺ほどなる円空仏	西村みゑ子
語部の訛やさしき囲炉裏端	植田 清子
買置きのバームクーヘン夜食とす	川内 麻美
親しさに少し距離あり式部の実	田崎セイ子
子規連載の朝刊や柿を食ふ	立石 律子
敷石の貝殻に射す月明り	田中ミヨ子
小夜時雨亡き師の句集読み返し	長瀬 朋孝
周りみな宅地となりし藁ぼつち	長浜 利子
牛突の鍛錬坂や木槿咲く	藤野 孝夫
奥利根の源泉匂ふ時雨かな	真下 章子
裏庭に出て茶の花に出逢ひけり	村木 道子

初冬の石よりぬつと亀の首
冬めくや早寝に残る灯の温み

森 すゞ子
酒井 富子

天窓の光のびやか神無月
冬浅し小舟行き交ふ波浮港
秋深し使ひ古りたる住所録
島影とひとつにとけて秋の海
凧の音たててくる村外れ
金比羅の秋や海底探査船
虫のこゑ点ることなき常夜灯
マーチングバンドやメリークリスマス
短日や箇条書なる置手紙
柿挽ぐに大空一掴みしたり
堪忍袋切れさう熟柿落ちさうに
金秋や瀬戸の夕日に島と雲
立冬の日差し回り来魚干場
幾筋の峰越す雲や神の旅
息荒し獵犬光るまなこ持ち
揚子江に動きみせたり浮寝鳥
大嘗祭御神楽ひびく秋の夜半
冬支度木立の影を低くして
教皇と平和を願ふ冬の夜
来て欲しや南の島へ雪女

益子 桂子
森川恵美子
佐藤 聡
城戸崎雅崇
中村 順次
富沢 壽勇
丹羽 康夫
吉田 達哉
森 幸子
山口 容子
山中ひでの
林 剛
大野千鶴子
林 剛
東 俊子
三原真紀子
西五辻芳子
細見 昌代
田中 勝
福地 義雄

2020年1

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

田水落す魚は川へ放ちやり
秋風に潮の匂ひや漁師めし
小夜更けて半分づつの栗きんとん
螻蛄の怒りの鎌を構へけり
姉の名を母思ひ出す良夜かな
山荘を啄木鳥たたく岳樺
とりあへず和平交渉竈馬
提灯を門に通りに村の秋
月夜見の宮より出でて毒きのこ
誰彼にやさしくしたき星月夜
雨戸閉づる手を休めたり虫の夜
虫の音や三週ぶりのわが寝床
谷底の水音目指し落葉踏む

藤本 隆子
栗本 一代
鈴木 春菜
川内 麻美
立石 律子
佐々木 成
仁田 浩
古川 邑秋
西村みゑ子
三原真紀子
植田 清子
大野千鶴子
川上 和昭

呼出しブザー押しかけて止め夜長かな	たむら 晩秋 (故)
台風に空路航路の止まる島	藤野 孝夫
みのこづち数多つけつつ引抜きぬ	村木 道子
せせらぎの音を跳び越え吾亦紅	川内 一浩

サイレンや金木犀の夜気の奥	朝田 玲子
熊笹の枯葉くづれが裾に付き	川竹 美樹
ひとり食ふさんま苦しとつぶやいて	谷口 文子
秋鮭を焼いて弔ふ猫の死に	昌山瑠璃子
横からの富士は影めく後の月	片山 旭山
水槽のまんぼうの浮く月夜かな	鴻坂 佳子
仕出屋の看板古りし秋時雨	石神 主水
ゆきあひの空ふはふはと雪虫来	西五辻芳子
野鶺の杭探しみる田んぼかな	堀口 忠男
かさかさと莢はじかせて種を採る	益子 桂子
展墓なり土盛り直し濁り酒	大石 高典
帰路につく羊の列や秋の雲	城戸崎雅崇
大弓の四方を祓うて秋社かな	丹羽 康夫
卵抱く大蠶螂の威嚇かな	前田 鈴子
どの家も大家族なり柿たわわ	森 幸子
助けなきやと幼ひたすら藪を掘る	山口 容子
大根蒔く畝間に入日落ちにけり	山田ミチ子
拾ふ気のなきに手が伸びくぬぎの実	南田美恵子
種蒔いて三年のちの零余子飯	塚本 郁子
秋刀魚さんま呟いて行く使ひの子	田崎セイ子

2019年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

夜業せる大工の音や空木建	伊藤 武敏
固き椅子に座り直すも子規忌かな	羽鳥 正子
太陽電池パネルのノイズ星月夜	中嶋 文子
無花果を煮てゐる雨の日曜日	西村みゑ子
家族の目あつめ初成り林檎割る	佐々木 成
老眼の獵師が語りましら酒	大石 高典
ちんちろりん久しかりけり夜の闇	中島 冬子
南瓜切る腕の力を試すごと	南田美恵子
塔頭に馬上門あり初尾花	城島 千鶴
大の字の背にありがたき今年藁	吉田多々詩
宙返る鷺のかたちの鳥威	高橋キセ子

拷問を解かれしこち涼新た	長浜 利子
よみがへる埴輪や土器や星月夜	真下 章子
秋日傘立て掛けてやる犬の小屋	藤本 隆子
秋麗ら愁ふることも忘れゐて	友永基美子
軽らかに雨戸繰り込み厄日去る	川上 和昭
風向きのやや変はりあり処暑の朝	植田 清子

どこでもドアあれば友訪ふ秋の暮	たむら 晩秋
秋雨の海や基地建設の地に	知念 幸子
梅雨明けて日ごとに青し浦の海	藤野 孝夫
明朝体に資料統一厄日来る	古川 邑秋
都有地に夜を鳴きつなぐちろ虫	川内 麻美
秋日和ロシアの猫は愛想良し	河村 純子
泥付きし稲を洗へば黄金なす	山口 容子
おろおろと夕顔の実を抱へをり	谷口 文子
望月と夜明けの山や地蔵尊	斉藤 耐
田から田へ千枚の音水落す	遠藤 長代
稲架掛けに峡の日陰のおよび来し	渋谷 啓子
秋深し鍵盤にドの印付け	仁田 浩
思ひ草出逢ひしところ秘めておく	西五辻芳子
グローブの革のほひや秋の空	佐藤 聡
ゆらぐ灯や雨降りしきる盆詣で	櫛淵かりな
赤とんぼ田んぼさはさは乾きけり	酒井 富子
蒟蒻に三年の秋むかへけり	益子 桂子
虫の声までも家族よ退院す	大野千鶴子
秋の蚊に生きてゐしかと逃しけり	東 俊子
色白の母のおもかげ糸瓜水	田崎セイ子

2019年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

夜の雨の地を打つ強さ夏の果て	益子 桂子
草笛や昭和の歌を引き寄せて	遠藤 長代
ほほづきのぷくりと熟れて空青し	大野千鶴子
長き夜や灯火管制ありし頃	伊藤 武敏
牧圀む青嶺の奥の大青嶺	佐々木 成
その中に海釣りの灯や星月夜	鴻坂 佳子
甲斐なれや丘の形に葡萄棚	宮澤 淑子
風鈴は不器用に鳴るばかりなり	片山 旭星
生も死も紫陽花も色濃くなりぬ	山本 真也

音たてて水呑む猫や秋暑し
室温をやや上げ気味に秋近し
蟬の声のみ響きをり原爆忌
海よりも暮早き山赤とんぼ
年毎やメモを頼りの盆仕度
面と小手を干し並べたり帰省の子
掃除すませ着替へすませても残暑
小流れに沿ひて参道涼新た
山寺の緑蔭にあり慰霊の碑
主亡き畑にかたぶく案山子かな

長浜 利子
田崎セイ子
山口 智子
山中ひでの
福地 義雄
藤本 隆子
村木 道子
城島 千鶴
森 すゞ子
吉田多々詩

新涼や鉄砲魚の狙ひ打つ
水槽に水跳ぬる音今日の秋
台風や庭の真中に脚立伏せ
盆すぎや部屋を抜けゆく風豊か
それぞれに橋ある社家や水の秋
終戦日父は子の墓撫でしのみ
新涼や寝入りし嬰の涙あと
大文字の消炭求め夜明け前
夕蟬や熱の下がらぬ子の虚ろ
樹液濃し大紫の蝶の舌
夕立に傘さしかけてくれし人
桂離宮拝観日なり驟雨来る
夕焼を同じと遠い街の友
新涼や六歩に渡る狸橋
雨粒のあぶくの立つや大夕立
釣忍作りし父やいまは亡く
新蕎麦や喉ごしはこの一瞬に
折紙や昭和恋しき秋の夜
語り合ふ水面の灯り原爆忌
杖突きて老の踏ん張り秋暑し
猿山の猿の動きも極暑かな
ユニホーム脱がず駆け入る夏の海

川内 麻美
川内 一浩
真下 章子
渋谷 啓子
木村 静子
森 幸子
前田 鈴子
丹羽 康夫
谷口 文子
堀口 忠男
石原ゆき子
牛田あや美
昌山瑠美子
中井 昭雄
仁田 浩
南田美恵子
山中伊蘭子
東 俊子
田中 勝
長瀬 朋孝
城戸崎雅崇
中野 悦子

2019年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

ををしさやルーペのなかの子蠶螂
射干の花かたはらの布袋さん
恐竜のひそむ気配か夏蕨

中島 冬子
城島 千鶴
遠藤 長代

七夕や異国の文字の少女にも	立石 律子
あと一駅の席をゆづられ半夏生	村木 道子
並べたる衣に未来お風入	河村 純子
まだかたき桃に歯をあて香り食ぶ	小島 和
筒鳥や杣夫ほほぼる輪つぱ飯	佐々木 成
毒あると夫の制する夾竹桃	川内 麻美
振花や時計回りに閉まる蓋	川内 一浩
鳴き鳴きて果てたる蟬の翅の美し	山本 京子
ながむしのみるかもしれぬそのあたり	山本 真也
初蟬と聞きしが夕べ落蟬に	宮澤 淑子
じりじりと慰霊碑の火や蟬時雨	田中 勝
夏空や目に風運ぶポプラの葉	鈴木あるの
夏の夜や芳一聴かば八雲をり	宮原亜砂美
娘らの団扇は笑ひ喋るごと	仁田 浩

抜歯後の止血の綿を噛む極暑	長浜 利子
トーストの焼けて初蟬じいと鳴く	朝田 玲子
嘶きや斎王代の懸葵	谷口 文子
葦の丈伸びよ伸びよと行々子	堀口 忠男
履き慣れぬ下駄のはしやぐ夏祭	前田 鈴子
夕河岸の立ちしはむかし防波堤	中野 梓
校庭にラジオの響く夏休み	森川恵美子
嵩に積む下刈の草いきれかな	中村 順次
トラクターはゆつくり慌て蝸牛	丹羽 康夫
追ひ出しぬ守り神てふ蜘蛛なれど	中村 悦子
藁屋根に遺影に過ぎし終戦日	鴻坂 佳子
滑草引く戦時に食べしことなれど	羽鳥 正子
板の間に風すべらせて扇風機	真下 章子
噴水の頂に立つ少女像	城戸崎雅崇
朝いちばん声をかけつつ胡瓜もぐ	山口 容子
帰省子や波音のみの始発駅	山中ひでの
鮎に串刺して焼くなり男なり	片山 旭星
片蔭や帰りに語りつぐベンチ	中井 昭雄
片蔭を行けば会場遠退きぬ	南田美恵子
羽衣のいる貰ひしか蓮の花	森 幸子

2019年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

子規庵の部屋半分へ西日射す

鴻坂 佳子

あぢさみの色いと剪る朝まだき	宮澤 淑子
少年の声は木の上柿の花	西村みゑ子
光り合ふ出羽一国の代田水	佐々木 成
雨つつ切り餌運び来る夏燕	酒井 富子
梅雨に入る雨垂れ時に不整脈	中島 冬子
斎宮趾に世の音遠き青葉闇	中野 梓
迷路めく鉄路乗り継ぎ梅雨の旅	遠藤 長代
畦塗りて棚田の底の昼餉かな	川上 和昭
残業の父の夕飯蠅帳に	田崎セイ子
七夕や日に三羽折る千羽鶴	友永基美子
井田に早乙女揃ひ太鼓の音	長瀬 朋孝
語り部を若手に継いで慰霊の日	福地 義雄
紫陽花に先づ母の忌を思ひけり	村木 道子
万緑のふところのなか斎王碑	山中ひでの
あぢさみや寄り道につい十日間	朝田 玲子
夏めくや神前に能献じ終へ	河村 純子

似顔絵が少し納得いかぬ夏	川内 麻美
寄りそひて鳩の浮巢の水輪かな	栗本 一代
ひとり来て蛍こいこい土手の径	中村 順次
校正のペン入れ乱れ虎が雨	大石 高典
はね返す鱈の青さよ夕餉前	小畷 和
いきなりの九十九折なり登山口	野木 正博
草むらをかき分けて浜夏来たる	仁田 浩
雨合羽備へぬうちに梅の雨	南田美恵子
音階のごとく節ある葦簀かな	鈴木あるの
白南風や牛の尻尾の揺れどほし	中井 昭雄
知らずして子が植ゑし苗胡瓜咲く	山本 京子
車間距離大きく取つて夏惜しむ	山本 真也
青梅を見上ぐる母に笹を出す	田中 勝
負相撲の西瓜に落つる涙つぶ	中野 悦子
しつかりと壁の色なす雨蛙	酒井 富子
木葉木菟の飛来地ダムに沈むらし	堀口 忠男
天明噴火いま裸地の薄暑光	森川恵美子
蜘蛛の囿に雨の水玉二つ三つ	城戸崎雅崇
夏の庭へぐいと押しやりアロエヴェラ	富沢 壽勇
近江路に風の音聴く麦の秋	片岡 旭

2019年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

水 笥 集

鯖釣や沖のうねりに山育ち
草取の一人はご住職の作務
遠き日の馴れに草笛鳴ることよ
笥掘る祖父は今期を限りとふ
綿シャツに糊を利かせて今朝の夏
古沼や日照雨の欲しき雨蛙
バードデー籠に戻らぬ鳥いづこ
柿若葉老いに眩しき朝日差す
水ふくむジュラ紀の石や緑さす
いぬの仔のもらはれし家花いばら
梅雨最中不発弾処理続きをり
着衣をば何も変へずや立夏来る
白シャツの出番なきまま飛驒の旅
黙々と籠引き摺りて草取女
母の声聞きたく唄ふアマリリス
眠る子にハンカチを以て風送る
待ち侘ぶや少しく乾き柏餅

伊藤 武敏
真下 章子
大野千鶴子
荒木 昭代
植田 清子
志多伯節子
田崎セイ子
長瀬 朋孝
西五辻芳子
西村みゑ子
福地 義雄
村木 道子
山口 智子
山中ひでの
小川 豊子
川内 麻美
河村 純子

甕へ雨集むるシゲや夏の島
時差一時間後のニュース梅雨に入る
流鏑馬の的飛ぶ先を目に追うて
鱒叩く音や釣果の乏しくも
滝行の祈りとどろく空也滝
指定席とハンカチ敷きて君を待つ
船底に海底を見る立夏かな
螢火に勝ち負けあらば右の勝ち
雪形は鷹の貌なす白根山
粽解く心の襷を解くごとく
恪勤の靴音過ぐる柿の花
命日や熊野の藤は盛りすぎ
青時雨螺灯かた手にひおひ坑
風死せり遺品を捨つるために酔ひ
寝袋に見上ぐる小窓青楓
こふのとり舞ひ降りて来る青田波
笛の列果ての果てまで植田あり
トラックに稚児ふたり乗せ春祭
警笛の追ひかけてくる薄暑かな
勁草のよろしかりけり風薫る

益子 桂子
小 和
栗本 徳子
朝田 玲子
野木 正博
森川恵美子
牛田あや美
南田恵美子
堀口 忠男
城戸崎雅崇
中村 順次
丹羽 康夫
宮原亜砂美
吉田 達哉
森 幸子
山口 容子
吉田多々詩
石原ゆき子
中井 昭雄
仁田 浩

2019年7月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

水音の弾みに蝌蚪の紐弛む	川内 一浩
花散るや目玉ぎよろつと閻魔王	伊藤 武敏
掬はれて人に飼はれて蝌蚪となる	福田 将矢
雪形や岳のくぼみの馬の脚	高橋キセ子
軒下へ家族のやうに燕来る	酒井 富子
囀りが色添へはじめ里の山	益子 桂子
遊ぶ子の手に散らさるる雪柳	川内 麻美
山国に海豚の化石春うらら	長浜 利子
笛の音の田の面流るる春祭	吉田多々詩
考えの行きづまりたり露を煮る	羽鳥 正子
落花浴ぶる館を統べて鬼瓦	中野 梓
菩提寺もいつしか古刹夕桜	植田 清子
病床の妻に残像白牡丹	川上 和昭
夜桜や大提灯に令和の字	立石 律子
眺め入る望や平成四月なり	福地 義雄
彼岸詣つぎはいかなる吾が齢	村木 道子
胸上に十指を組みて春惜しむ	山中ひでの

十返りの花や復元武家屋敷	城島 千鶴
退屈な午後良しとして日永かな	片山 旭星
坂がかかる墓地へつらつら椿かな	宮澤 淑子
つばくらめ武家の長屋の軒低し	森 すゞ子
改装をしてゐるらしき燕の巢	古川 邑秋
春耕の桑の片減り父は亡く	遠藤 長代
花鉢に生まれ百足虫が畳這ふ	酒井 富子
燕きて昂る軒端そつとして	森川恵美子
横丁や少し小ぶりの花ミモザ	城戸崎雅崇
岩ばしる水のとどろに初つばめ	中村 順次
駿府城の路に阻まれ花筏	富沢 壽勇
春の鴨ともだちめきて初瀬川	丹羽 康夫
春筍の皮むく音の心地よき	宮原亜砂美
花の種蒔きて御百度ほど覗き	前田 鈴子
苗床の競ふごとくに二百箱	山口 容子
春昼の山並み煙り猫眠り	斎藤 耐
鉢植のみつば一皿肴とす	藤本 隆子
地震あとに槌音響く春の雲	東 俊子
初蝶を追うて千本鳥居かな	三原真紀子

花栗の香の地に低く奈良の闇

栗本 一代

2019年6月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

海上の風車ゆるりと油まじ	伊藤 武敏
旧道の岬の難所や揚雲雀	佐々木 成
本堂の障子明るき涅槃かな	酒井 富子
幾百の雛の視線にさらされて	益子 桂子
じやんけんの必勝法や山笑ふ	川内 一浩
色褪せしチケット二枚籠の夜	羽鳥 正子
仰ぎみる花に一身浮くごとし	鴻坂 佳子
諸共に齢かさねて雛も古希	中島 冬子
春眠を妨げにくる猫の鈴	長浜 利子
冴返る蔵書にしかと父の文字	渋谷 啓子
鳥雲に観察小屋にのこる餌	真下 章子
うぐひすの鳴くに口笛合はせをり	大野千鶴子
半合の米とぐ日々や彼岸寒	川上 和昭
腰までの潮に手摘みの石蓴かな	中野 梓
青年が傘差しくる木の芽雨	山口 智子
鳥帰る神の恵みの伊勢の海	山中ひでの
啓蟄の地に下ろされて杭の束	高橋キセ子

三角も四角もありぬ猫の恋	川内 麻美
九十の重みを杖に託す春	長瀬 朋孝
ダムに水満ち三極の花盛り	前田 鈴子
手にのせて子は花と言ふ春曇	山本 京子
ふきのたう三日見ぬ間に臆たけて	遠藤 長代
桜咲くに灰の降り来る桜島	野中 理伸
折りし子の笑みによく似し紙雛	吉田多々詩
春深し今日のをはりを横になり	森 裕子
花冷の石炭専用鉄路かな	中村 順次
藪椿くぐりて登る分教場	森 幸子
稜線の木々透けて見ゆ春の空	山口 容子
草餅や兄弟喧嘩ありし頃	中井 昭雄
春雨のぼつぼつと音が寄る	小野塚佳代
でんでんと卯の刻告ぐる春社かな	野木 正博
三月やキミマチサクラ忘るまじ	藤田 裕之
暁鐘や山抜けてくる春の風	田中 勝
白魚の命透けある一寸余	朝田 玲子

墨の濃き一字一氣に新学期	中野 悦子
浜大根列車過ぎてもゆれやまず	本多 智恵
蛇穴を出て古里に神宿る	志多伯節子

2019年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

折紙の角一つ立て鬼は外	中嶋 文子
旧道の埋もれかけたる春の山	羽鳥 正子
寒雷の轟き氷見は漁師町	伊藤 武敏
山寺の鎧ふは千の大氷柱	佐々木 成
魚は氷に上り試験の日のつづく	高橋キセ子
春駒の寝足りて藁にまみれをる	朝田 玲子
坂道のはじまりに会ふ梅の花	鈴木 春菜
春昼や声の見つかるかくれんぼ	渋谷 啓子
念入りに顔拭いて出る恋の猫	森 すゞ子
山間の暮しが動く梅の花	酒井 富子
着ぶくれの首より体温計入れて	益子 桂子
空つ風出迎ふごと 駅舎前	遠藤 長代
水際に腹這うて採る 露のたう	中島 冬子
盆栽のひよんと 抜きんで臥竜梅	城島 千鶴
一湾が石蓐や畑のごとくあり	西村みゑ子
トナカイの話し聞きゐて冬尽きぬ	大石 高典
数百の鳩のしづけさ余呉の湖	鈴木さやか

喉飴ののんどに馴染み息白し	川内 一浩
降る雪のさまを幾度も窓開けて	村木 道子
露の臺一つつきりを囲ひやる	藤本 隆子
身繕ひ次は何せむ初鴉	三原真紀子
白足袋の摺り足美しき狂言師	植田 清子
苗木植う難を転ずるまじなひに	吉田 達哉
臥す身にも春日ひとしく来たりけり	河村 純子
春浅し心浮き立つもの探し	鈴木あるの
薄氷の裏道うまく抜けて来し	古川 邑秋
若き日の言葉足らずや草の餅	森 幸子
亀らしき泥盛り上がり春近し	仁田 浩
耳澄ます鶯餅を掌に受けて	長瀬 朋孝
冬の月高し遠きは母のこと	立石 律子
雪空へ溶けゆく色の煙立つ	城戸崎雅崇
寒暖も暦どほりに春立つ日	藤田 裕之

豆撒の一夜明けたる庭に鳥	大野千鶴子
吾が餌へ氷を砕き白鳥来	西澤 勝
種紙に蚕の卵ひつそりと	森川恵美子
月の無き比良の山並み冴返る	片山 旭星
嵩よりも軽き苞なり若布なり	東 俊子

2019年4月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

気の上る思ひ鎮めて初鼓	河村 純子
塩抜きの茸に呼び塩寒四郎	高橋キセ子
東雲へちりぢりと消ゆ寒鴉	三原真紀子
農道に人並びをり初日の出	藤本 隆子
水仕了へ母が楷火に手を翳す	佐々木 成
冬空を透かしすつくと吉野杉	小寫 和
オリオンを高く掲げて星の数	川内 一浩
咲きしこと香をいちばんに裏の梅	中島 冬子
午後なれば片目失ひ雪うさぎ	田崎セイ子
勢づくどんどに气流見えてあり	羽鳥 正子
蝦芋の名残をかうて果大師	城島 千鶴
幼子の凧揚げの凧地を這うて	木村 静子
初夢は基地なき島よ鳥が舞ふ	知念 幸子
おみくじをよきに読み解き初詣	荒木 昭代
川底を鷗のあゆむも寒の内	田村としのぶ
いま出でし朝日とらへて麦青む	本多 智恵

初釜やすすと躡りて膝頭	西五辻芳子
小春日や柵に馬衣干されあり	森 すゞ子
杖の音しづかに通る年の暮	知念 恒男
よく売れるおばあの話年の市	福地 義雄
山眠りをる湯煙の隠れ里	川竹 美樹
陣痛の長き夜明けて薄氷	栗本 一代
研ぎ澄みし音の俎始かな	渋谷 啓子
あれあれまあ背ナの子どもの頬被り	前田 鈴子
日捲りの滞りある七日かな	長浜 利子
足跡に迷ひの見ゆる雪の上	益子 桂子
早まりし刻の高さにオリオン座	吉田 達哉
鴉鳴くのみ別宮の四日かな	中野 梓
寒の雨上るしづけさ阪神忌	斎藤 耐
雪落し竹はゆらりと背を伸ばす	石原ゆき子

東海の磯の香りよ冬座敷	牛田あや美
シンデレラ新幹線とやなごり雪	小川 豊子
年越や昨夜と変はらぬ今朝の酒	片山 旭星
寒栢の響き近づき遠ざかり	東 俊子
鳥来るに零すが多き実南天	田中ミヨ子
干支の本並べ図書館冬休み	中野 悦子

2019年3月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

脂採りし幹労りて松手入	山中ひでの
冬晴や釣られしものへ鳶の笛	羽鳥 正子
一湾を寒気の過ぎる監視小屋	志多伯節子
宇治川の疾き瀬音に山眠る	荒木 昭代
二重扉なんなく抜くる寒気かな	益子 桂子
短日や衝動買ひの袋提げ	高橋キセ子
餅米を洗ひ師走は人恋し	西村みゑ子
枯木星夜間飛行の灯が紛れ	植田 清子
冬灯し肉桂香るドイツ菓子	木村 静子
小雪や山並み撫づる雲の影	渋谷 啓子
年用意はや始まりぬ御用聞	村木 道子
べた風の海の冬鳥光りけり	本多 智恵
蠟八や暮れて魚鼓打つ僧衣美し	栗本 徳子
一月の燭一灯に千の黙	栗本 一代
しぐるるや三鉢の松を生し立て	城島 千鶴
冬だねと言へば頷く君のゐて	川内 一浩
竿先の躍るは冬の真鯛なり	宮原亜砂美

独り発つ子へ書くメリークリスマス	小野塚久子
赤き実を含めば苦し十二月	川内 麻美
親と娘呼び名の違ふおでん鍋	山本 京子
編みかけのセーター二年越しのこと	南田恵美子
ボルシチの味に正午の冬日かな	朝田 玲子
笹鳴や柞の森の枝が揺れ	中村 順次
好まざれどたくわん漬けて四斗樽	森 幸子
薬草の根のまぶしさや寒の水	山口 容子
冬川に一筋まじる湯の煙	真下 章子
本を読み耽る日となりクリスマス	小野塚佳代
大木の倒れて鶴の高音かな	石原ゆき子
年の瀬や役者は閉店間際に来	伊藤 恵

不定時法よろしかりけり日短	仁田 浩
間水は畑の蜜柑よ野良仕事	藤本 隆子
霧襖開け放つごと道が見え	青井 律子
板割の拳鍛へて去年今年	山城由香里
伊予石の緑泥片岩万年青の実	塚本 郁子
咳しつつ帰り来るなり午前さま	田崎セイ子
鴨の群乱す銃声蘆に風	田中ミヨ子
たわわなるもの無きは冬ざる庭	田村としのぶ

2019年2月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

夕風に枯野のひびき易きかな	高橋キセ子
日光街道菰巻く松へ雲垂るる	伊藤 武敏
遠吠えの間遠や長き夜のパズル	鴻坂 佳子
涙拭かず行く道はここ木守柿	中嶋 文子
冬うらら裏の畑もポチも無く	川内 一浩
空はひとつ孫は巴里にて翳雲	友永基美子
一部屋に猫とちだめて障子貼る	長浜 利子
魯田のことごとく彩違へあり	荒木 昭代
ゆく秋や昭和を遠く思ふとき	植田 清子
いつよりぞここに置かれし鴉の贅	大野千鶴子
追ひかけて来て渡されし柿三つ	立石 律子
初霜や鋏打ち込めば火花散る	田中ミヨ子
紅葉山お茶に集まる茶の間より	田村としのぶ
月の夜を語りあかしてしまひけり	知念 幸子
冬の海静かに広し御用邸	村木 道子
小春日や伊良湖岬に定期船	森 すゞ子
菩薩の名三つおぼえて柿日和	山本 真也

波郷忌のこのまま空へ観覧車	川内 麻美
時雨ても羅漢の貌はそこにあり	栗本 一代
葡萄酒にほてりし頬の夜寒かな	小嶋 和
鳩のゐて波の騒ぎのなかりけり	吉田多々詩
乱れたる竹伐る音や背を正す	西五辻芳子
林檎喰ふときの乙女は魔女の貌	宮原亜砂美
水槽の魚動かぬ冬日かな	城戸崎雅崇
段取りを末から数へ十二月	山本 京子
作業着に着替へ手を貸す大根干	遠藤 長代
見過ごしし事の多さや椿の実	中井 昭雄

身にしむや鴉に怯む鳩のみて	南田美恵子
柿干すや庖丁にある渋のいろ	益子 桂子
綿虫を手にのせ子供心なる	酒井 富子
黒々と十一月の裁ち鉄	真下 章子
人生に宿題残る落葉かな	森 裕子
バス停や日の出時刻の初時雨	斎藤 耐
今朝またも京の底冷えひとしきり	北川 明
北山を越え来る雪の匂ひかな	仁田 浩
大根の青首並ぶ植木鉢	田中 勝
素人に長短のあり柿簾	小野塚久子

2019年1月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

陽のいろの上昇気流鷹渡る	伊藤 武敏
露けしやゆつくり落つる鳥の羽根	高橋キセ子
この町にこの空のあり小鳥来る	川内 一浩
台風の手荒き誕生祝ひなり	植田 清子
鴟の贄見つけし今朝の庭掃除	大野千鶴子
庭下駄のぼつりと置かれ秋深し	田崎セイ子
軍鶏の勝負決まらず暮早し	田中ミヨ子
千振や亡父の苦り顔がふと	友永基美子
秋薔薇花がら摘みて香に噓せて	長瀬 朋孝
遊子ともなれず佇む花野かな	西村みゑ子
柿喰ひに夜毎来たるは何の鳥	福地 義雄
朝市の通草ほどよく割れてあり	真下 章子
論じ合ふ窓の向かうり秋日和	南田美恵子
短日の帰宅は淋し独りの居	村木 道子
たれ待つや冬田の畦の白き犬	三原真紀子
くまげらの消えたる山のうつろかな	佐々木 成
末枯るる木の間赤き実を見せて	山本 京子

長病みの見立て変はず冬に入る	吉田多々詩
恙なく終り稲の香ある刈田	酒井 富子
長き夜や引越しを待つガムテープ	川内 麻美
夜学生をり裸灯の無人駅	遠藤 長代
倒木に生ゆる茸は見捨てられ	渋谷 啓子
新しき熊の栗棚二つほど	長浜 利子
瓢の笛吹く縄文の子のやうに	林 清恭
農道に刈稲並ぶ奥丹後	古川 邑秋

夜が更くる頃や鞠子のとろろ飯
回覧板に稚児の募集や秋祭
かぐや姫気分の縁や月見酒
朱き実の小さきに秋の移りけり
鈴虫の声のかすれや夜が明くる
この里の風は変はず吊し柿
稲架に稲架けて本日終はりとす
子らよ子らよ秋果は全部あげるから
月明り机に諸手突きて立つ
月光に汐のしみ込む干潟かな
行列を少し離れてみて小春

宮原亜砂美
石原ゆき子
牛田あや美
小川 豊子
田中 勝
仁田 浩
藤本 隆子
山本 真也
山中ひでの
川上 和昭
志多伯節子